地域との協働による高等学校教育改革推進事業　地域魅力化型

大槌高校三陸復興みらい創造プロジェクト（大槌高校魅力化構想）

東日本大震災津波によって壊滅的な被害を受けた
三陸沿岸部の復興を担い、リードする人材の育成
を地元の教育資源を活用しながら地域との協働により進める。

復興研究会

- 定点観測班
- 他校交流班
- 防災町づくり班
- キッズステーション班
- 広報班

発　展

大槌学園 吉里吉里学園 『ふるさと科』

継承・発展

事業での取り組み

学校設定科目「三陸みらい探究」

三陸沿岸部の地域課題を「防災」「町づくり」「環境自然」の三つの観点から捉え、考察し、行動し、発信する。

「三陸ラーニングジャーニー」

東日本大震災津波からの復興に取り組む先進地域を訪問し、交流する。

「大槌発みらい塾！」

地域に貢献する職業人を招き、職業体験や職業観を語ってもらう。

教科横断的な取り組みで、「主体的・対話的で深い学び」を実現

☆育む力☆

①大槌町を基点として、震災後の三陸沿岸地方の新たなまちづくりの中心となるリーダーを育成する。
（リーダーシップ）

②三陸沿岸部の生活に密着した身近な問題を自分事と捉え、その解決へ向けて積極的に行動し、発信する能力を養う。
（町づくり）

③三陸大震災津波の経験を伝承し、自らの課題として捉え、地域の防災活動の中心として活躍できる人材を育成する。
（防災）

④三陸沿岸部の豊かな自然を様々な角度から捉え、その活用方法を考える中で、郷土への愛着を育む。
（自然環境）

大槌高校の魅力化に取り組む魅力化推進員を三名配置。
カリキュラム開発等専門家と地域協働学習実施支援員を兼務させる。

岩手県教育委員会

地域協働事業コンソーシアム

大槌高校魅力化構想会議

高校	地域	地元企業	自治体	中高連携	有識者	学術機関
大槌高校 PTA 大槌高校同窓会	大槌町商工会 おらが大槌夢広場	千田精密工業	大槌町	大槌学園 吉里吉里学園	カタリバ	東京大学 国際沿岸海洋研究センター

運営指導委員会

大槌町が中心となって高校の魅力化をバックアップ

ふりがな	いわてけんきょういくいいんかい	ふりがな	いわてけんりつおおつちこうとうがっこう
管理機関名	岩手県教育委員会	学校名	岩手県立大槌高等学校

２０１９年度　地域との協働による高等学校教育改革推進事業　実施体制の概要

１　管理機関・学校の概要

（１）管理機関名、代表者名

管理機関名：岩手県教育委員会
代表者名　：教育長　佐藤　博

（２）学校名、校長名、研究を実施する学科

学校名：岩手県立大槌高等学校　　学科：☑普通科　□専門学科　□総合学科
校長名：瀬戸和彦

２　取組内容

2011 年の東日本大震災津波によって、三陸沿岸部は未曾有の被害を受けた。大槌町も例外ではなく、町は壊滅的な状況であった。町は国や企業、各種団体から様々な支援を受けながら、復興へ向けて一歩一歩取り組んできた。2013 年に発足した生徒の自主的な活動である「大槌高校復興研究会」は町内の復興の様子を記録し、復興への提言を行い、震災と復興状況を伝える活動を行ってきた。2018 年５月には文化交流施設「おしゃっち」が開館し、2019 年３月には鉄道が開通し、三陸復興道路が東北自動車道と結ばれる。インフラが整備され、生活基盤は整えられつつある。しかし、震災によって分断された地域コミュニティの再生や少子高齢化、農林水産業の育成、防災体制の確立など問題は山積なままで、ソフト面での復興は道半ばである。大槌町では教育による町づくりを標榜し、０歳から 18 歳までの学びの保障を掲げている。2016 年度、町内に小中一貫の義務教育学校、大槌学園が開校し、学校設定教科の「ふるさと科」を開設することで、郷土に愛着と誇りを持ち、故郷の未来に寄与する児童の育成を実践している。本校と大槌町は昨年５月に震災伝承推進活動に関わる協定書を取り交わした。また、大槌町は地域と協働で本校への支援を行うために、昨年 10 月に大槌高校魅力化構想会議準備会、12 月に第１回の大槌高校魅力化構想会議を開催した。大槌町長を会長、本校校長を副会長に据え、商工会や町内企業、ＮＰＯ、同窓会長、ＰＴＡ会長などに委員を委嘱し、地域と協働して大槌高校の魅力化を図ることを確認した。この事業を「大槌高校三陸復興みらい創造プロジェクト」と名付け、大槌町を基点に三陸沿岸部のコミュニティの中心となる次世代の育成を目指すこととした。大槌町では大槌高校の魅力化を担当する魅力化推進委員３名を大槌高校に配置した。具体的な事業としては大槌学園の「ふるさと科」を継承し、大槌高校復興研究会の活動を発展させた学校設定科目「三陸みらい探究」を開講する。三陸沿岸部の各分野の課題について知り、その中で関心のあるものについて詳しく調査してその解決策を考察することで社会の諸問題に主体的に考え行動する能力を養成していく。また、大槌町内外の各方面の職業人を招いて講演を行う「大槌発みらい塾！」や被災地を訪問し、地域課題を共有する「三陸復興ラーニングジャーニー」などを展開する予定である。これらの事業を通じ、主体的で対話的で深い学びを行い、東日本大震災の被災を乗り越え、三陸沿岸部の復興へ向けて地域の中核となって活動し、将来を担う人材を育成する。

３　管理・運営方法

（１）高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者名
大槌高校魅力化構想会議	大槌町長　平野公三
岩手県立大槌高等学校	校長　　瀬戸和彦
岩手県教育委員会	教育長　　佐藤　博

（２）将来の地域ビジョン・求める人材像等の共有方法

大槌町では０歳から 18 歳の教育の指針を定めた「子供の学び基本条例」（2019 年３月制定）がある。本条例の第３条 教育の目標の項目を踏まえ、大槌高校ではさらに「三陸沿岸部の復興へ向けて地域の中核になって活動し、将来を担う人材」を目標に設定した。また今年度以降、上記の目標である「三陸沿岸部の復興へ向けて地域の中核になって活動し、将来を担う人材」から具体的に求められる資質能力を導き出し、総合探究の目標、各教科の目標との接続を図るカリキュラムマネジメントの研修会をコンソーシアムの委員や学校教職員ともに行い関係者へ共有を図っていく。

※ 参考　大槌町子供の学び基本条例

第３条　大槌町の子供における教育は、次に掲げる目標を達成するために行われる。

(1)豊かな体験を通して、物事を探究する意欲を育み、自らのありたい姿や志を深め、予測困難な未来を生きるため生涯学び続けることのできる力を養うこと。

(2)地域社会の課題に対し、当事者として主体的に参画し、対話と共感により、互いの立場の違いを越えて協働し、その解決に寄与する態度を養うこと。

(3)町の伝統文化や豊かな自然への深い体験や理解を通して、大槌町に愛着と誇りを持ち、ふるさとの未来に寄与する態度を養うこと。

(4) 防災に関する知識と行動を習得し、自助・共助・公助の精神を養うこと。

（３）コンソーシアムにおける研究開発体制

上記コンソーシアムは 2018 年 12 月に発足した「大槌高校魅力化構想会議」を母体とする。構想会議は会長を大槌町長、副会長を大槌高校長、大槌町議会議長とし、行政から副町長、議会から大槌町議会議員、地元企業、商工会、一般社団法人おらが大槌夢広場代表理事、地元中学校の校長及びＰＴＡ会長、有識者としてＮＰＯカタリバ代表理事、大槌高校関係者として大槌高校同窓会長、大槌高校ＰＴＡ会長、大槌高校副校長を委員として構成される。今後、子育て世代を中心に女性の委員を複数名任命する予定である。また、町内に東京大学大気海洋研究所の国際沿岸海洋研究センターがあることから、コンソーシアムへの協力を依頼している。魅力化構想会議は「大槌高校のあるべき姿やそれを踏まえた大槌高校の魅力化、活性化について構想をまとめる」ことを目的としており、町内各界からの意見を集約し、大槌町と協働しながら主体的で対話的で深い学びを行い、地域社会をリードする人材の育成を目指し、研究開発に取り組む予定である。

（４）カリキュラム開発等専門家（地域魅力化型・プロフェッショナル型）、海外交流アドバイザー（グローカル型）の指定及び配置計画

今年度、大槌町から３名の大槌高校魅力化推進員が配置された。その中から１名をカリキュラム開発等専門家に指名する。

所属　ＮＰＯカタリバ

現職　大槌町教育委員会　教育専門官　菅野祐太（常勤）

（５）地域協働学習実施支援員の指定及び配置計画

前述の大槌高校魅力化推進員３名のうち２名を地域協働学習実施支援員に指名する。

所属　ＮＰＯカタリバ

起塚拓志（常勤）

三浦奈々美（６月から配置）

（６）運営指導委員会の体制

実施する事業の計画・運営について指導・助言をいただく。委員は以下のとおり進める。

所　属・役　職　等	氏　　名
東京大学教育学部教授	牧　野　　篤
岩手大学農学部教授	廣　田　純　一
東京大学大気海洋研究所 国際沿岸海洋研究センター	田　中　　潔
認定ＮＰＯ法人カタリバ代表理事	今　村　久　美
おらが大槌夢広場代表理事	神　谷　未　生
大槌町教育委員会教育長	沼　田　義　孝
大槌町立大槌学園長	松　橋　文　明
大槌町立吉里吉里中学校長	金　野　　節

（７）研究成果報告・事業成果の検証に向けた計画

例年３月 11 日に行われる「震災と復興を考える集い」で復興研究会の各班の活動を発表してきた。また、他校交流や復興関連のイベント、表彰式などで復興研究会の活動を発表する機会を持ってきた。町の震災から復興へ向けての自分たちの活動を発表することで生徒は大きく成長した。今後も「三陸みらい探究」や「三陸復興ラーニングジャーニー」を通して、自分たちの活動や考えを発表する機会を作る。３年生の６月頃、「三陸復興みらい創造プロジェクト成果発表会」を実施する。また、それぞれ新たに取り組む事業についてルーブリック評価やポートフォリオ評価を行い、検証を重ねながら改善していく。年１回全体の報告書をまとめると共に、事業内容を説明したチラシを広報で全戸配付し、地域の理解を求める。

（８）管理機関又はコンソーシアムによる主体的な取組・支援

岩手県教育委員会は、事業の内容や教育課程編成、取組について助言、指導を行う。

大槌町は、大槌高校と震災伝承推進活動に関する協定を交わし、町の文化交流施設に復興研究会の活動を常設して展示している。また、町の危機管理室と連携して防災訓練を行い、出前授業の講師をお願いするなど連携を深めている。

一般社団法人おらが大槌夢広場が毎年３月に主催する「高校生企業体験プログラム」へは毎年 20 名以上が参加している。今後もこれまでの関係を大切にしながら、復興研究会が行ってきた活動をカリキュラム化していく。

（９）事業終了後の継続的な取組の実施に向けた計画

大槌町では、大槌町教育大綱（2018 年３月に公示）、大槌町第９次総合計画（2019 年３月に公示）、大槌町子供の学び基本条例（2019 年３月に公示）において、「地域を舞台とした魅力的な高校教育の実現」を打ち出している。本事業が公表される以前に大槌町・地域と協働して本校の魅力化に取り組むことをしており、その中で魅力化推進員３名が配置された。本事業は大槌町と本校が協働して計画している大槌高校魅力化を推進するものであり、事業終了後も本事業の目的でもある人材育成を、町と高校との協働により進める。

２０１９年度 地域との協働による高等学校教育改革推進事業 研究開発の概要

<table>
<tr><td>指定期間</td><td>ふりがな</td><td colspan="5">いわてけんりつおおつちこうとうがっこう</td><td rowspan="2">②所在都道府県</td><td rowspan="2">岩手県</td></tr>
<tr><td>2019～2021</td><td>① 学校名</td><td colspan="5">岩手県立大槌高等学校</td></tr>
<tr><td rowspan="3">③対象学科名</td><td colspan="5">④対象とする生徒数</td><td colspan="2">⑤学校全体の規模</td></tr>
<tr><td>１年</td><td>２年</td><td>３年</td><td>４年</td><td>計</td><td colspan="2" rowspan="3">全学年２クラス　計６クラス
教職員数　２７名（非常勤を除く）</td></tr>
<tr><td>普通科</td><td>42</td><td></td><td></td><td></td><td>42</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td>⑥研究開発構想名</td><td colspan="7">大槌高校三陸復興みらい創造プロジェクト（大槌高校魅力化構想）</td></tr>
<tr><td>⑦研究開発の概要</td><td colspan="7">「三陸みらい探究」（学校設定科目）
三陸沿岸部の地域課題について研究し、地域のリーダーを育成する。
「三陸復興ラーニングジャーニー」
復興に取り組む市町村や学校を訪問し、復興課題に取り組むための視野を広げる。
「大槌発みらい塾！」
大槌町内外の職業人に職業観や職業体験を語ってもらい、人生設計の一助とする。</td></tr>
</table>

⑧研究開発の内容等

⑧-1 全体

(1) 目的・目標

東日本大震災津波によって壊滅的な被害を受けた三陸沿岸部の復興を担い、リードする人材の育成を地元の教育資源を活用しながら地域との協働により進める。

【具体的目標】

①大槌町を基点として、震災後の三陸沿岸地方の新たな町づくりの中心となるリーダーを育成する。**（リーダーシップ）**

②三陸沿岸部の生活に密着した身近な問題を自分事と捉え、その解決へ向けて積極的に行動し、発信する能力を養う。**（町づくり）**

③東日本大震災津波の経験を伝承し、自らの課題をして捉え、地域の防災活動の中心として活躍できる人材を育成する。**（防災）**

④三陸沿岸部の豊かな自然を様々な角度から捉え、その活用方法を考える中で、郷土への愛着を育む。**（自然環境）**

(2) 現状の分析と研究開発の仮説

①壊滅的な被害を受けた東日本大震災からの復興に取り組む大槌町では、０歳から 18 歳までの教育の保障を掲げ、教育の充実により町内の課題に取り組もうとしている。2017 年に小中一貫の義務教育学校である大槌学園が開校し、学校設定教科「ふるさと科」により、地域に根ざした教育を行っている。大槌高校とは昨年５月に「震災伝承活動連携協力に関する協定書」を取り交わし、協力を深めている。

②震災当時避難所となった大槌高校で献身的に働いた先輩方の思いを受け継ごうと 2013 年に大槌高校復興研究会が発足した。防災町づくり班、定点観測班、キッズステーション班、他校交流班、広報班に分かれ、震災の記録や伝承、町の復興への提言などに取り組んできた。大槌町では少子化に伴い、大槌高校への入学者数が減少していることに危機感を持ち、昨年 12 月に地域が協働して本校への支援を行う「大槌高校魅力化構想会議」を開催し、大槌高校を支援する体制を構築している。

③仮説

東日本大震災津波からの復興を目指す三陸沿岸部の生徒に町づくり、防災、自然環境などの地域課題を自らの課題として捉えさせ、地域と協働しながらその解決方法を考察させ、行動させ、発信させる。このような学びを通して、地域・社会と関わりながら課題を発見し、解決に向けて主体的・協働的に取り組み、新たな価値を創造する能力を身に付け、三陸沿岸部の復興へ向けて地域の中核になって活動し、未来を切り拓く人材を育成できる。

	⑧-2具体的内容	**(1) 地域との協働による探究的な学びを実現する学習の実施計画** 学校設定科目「三陸みらい探究」は配当時間を１・２年次はそれぞれ２単位、３年次は１単位、計５単位とする。１年次はプレゼンテーションの技法の習得と大槌町の行政や企業、商工会などから講師を招聘し、地域の課題について講義を行う。その後、全員がそれぞれ「防災」「町づくり」「自然環境」の３つの観点による共通課題に取り組み、探究活動を行い、プレゼンテーションを行う。２年次では「防災班」「町づくり班」「自然環境班」に班分けし、それぞれの興味・関心に応じたテーマを設定して探究活動に取り組む。随時、講師を招いて情報収集しながら進める。12 月頃に中間発表会を開き、活動の成果についてのプレゼンテーションを行う。３年ではテーマを更に掘り下げてまとめ、「三陸復興みらい創造プロジェクト成果発表会」を開催し、プレゼンテーションを行う。 １年の 12 月に「三陸復興ラーニングジャーニー」を実施し被災地の他校との交流により、大槌高校生としての「三陸みらい探究」に取り組む意識付けを行う。 「大槌発みらい塾！」事業はＬＨＲの時間を活用し、町内外の職業人の体験談を聞く取り組みを１・２年次に年間６回を目処に行う。 また、Classi 等の学習支援ツールを活用することで学習履歴の管理（ポートフォリオ機能の活用）を行う。 **(2) カリキュラム・マネジメントの推進体制** 大槌高校魅力化構想会議をコンソーシアムとして位置づけ、行政や地域、地元企業、ＰＴＡ・東京大学国際沿岸海洋研究センター、カタリバなどと幅広く協働して事業に取り組んでいく。また、教科横断型の探究活動についても検討していく。 **(3) 必要となる教育課程の特例等** 学校設定科目「三陸みらい探究」は１年次２単位、２年次２単位、３年次１単位を実施し、「総合的な探究の時間」を開設せず、「社会と情報」２単位から１単位を減じて実施する。 学校設定科目「三陸みらい探究」は、東日本大震災津波からの復興の途上にある三陸沿岸部の大槌町をモデルに地域課題を学び、自分の課題として捉え、その解決方法について考え、行動し、深めることで地域のリーダーとしての成長を目指すものであり、「総合的な探究の時間」の目標を三陸沿岸部に限定して行うものであることから「総合的な探究の時間」を「三陸みらい探究」に代替する。 また、学校設定科目「三陸みらい探究」では１年次の前期に情報機器を用いたプレゼンテーションの技法や情報の収集法と集計方法などを学ぶことや、学んだ技法を駆使して、プレゼンテーションを行ったり、情報機器を用いた探究活動を行い、その中で情報機器を適切に使用する態度も指導することから、「社会と情報」を１単位減じて「三陸みらい探究」に代替する。
⑨その他特記事項		大槌高校復興研究会は東日本大震災当時、学校が避難所となり、その運営に尽力した先輩方の意志を受け継ぎ、地域の復興に貢献したいという思いから震災から２年後の 2013 年４月に生徒主体の活動として発足した。現在、５班に分かれて活動している。定点観測班は大槌町内 180 カ所を年３回写真で記録、他校交流班は本校を訪れる高校等との交流、キッズステーション班は町内の児童施設でのボランティア活動、防災・町づくり班は町内の町づくりへの提言・防災活動、広報班は各班の活動を「復興研究会報告」にまとめている。定点観測は 2018 年度までに 18 回を数えた。当初は何も変わらない風景を数年間撮り続けてきたが、現在では撮り続けることで町の復興の記録として価値のあるものとなっている。また、各活動を引き継ぐことで復興への思いも受け継がれ、その復興への思いを交流する他校生や各種イベントで伝えている。さらに、大槌町と提携を結び、震災の記憶を伝承する活動や町づくりへの提言活動、共同の防災訓練などを行っている。昨年度は世界防災フォーラムや安倍首相が来校した際に活動についてプレゼンテーションを行った。本年度は復興大臣からの感謝状やぼうさい甲子園で優秀賞を受賞しており、この活動をプロジェクトのベースとして、主体的で対話的な深い学びを展開したい。